

『解体新書』を出版した杉田玄白が活躍していたころ、津山藩の江戸屋敷に宇田川玄随（槐園）という藩医がいました。

江戸屋敷は、今の東京駅の南端辺りの鍛冶橋という所がありました。今でも鍛冶橋という交差点があるので、おおよその位置が分かります。宇田川家は玄随の父・道紀の代に津山藩に召し抱えられ、玄随はこの鍛冶橋の藩邸で生まれました。宝暦5年（1755）の出生ですから、今から253年前です。

この宇田川玄随が、日本最初の西洋内科書『西説内科撰要』（全18巻）の刊行を開始したのは、寛政5年（1793）、38歳の時でした。

日本の医学は古くから中国の医学を基礎に発達してきたので、それを信じて疑わない漢方医たちは、新しい西洋医学に強く反発していました。もちろん、玄随も最初はその一人でした。しかし、杉田玄白らの蘭学グループと交流したことにより西洋医学を志し、10年もの歳月をかけてこの内科書を翻訳したのです。

出版した時『解体新書』の刊行からすでに19年経っていましたが「西洋医学とは外科だ」と言われるほど、西洋内科に関する知識はほとんどありませんでした。この書の刊行によって次第に知識が広まり、西洋内科の専門医が生まれることになったのです。

では、この事業をやり遂げた玄随とは、一体どのような人物だったのでしょうか。『西説内科撰要』の序文には、中国のことわざなどが巧みに引用されています。また、残されている手紙を読ん

## 洋学博覧漫筆

～宇田川玄随と『西説内科撰要』～

でも、文章や用語、筆使いとも群を抜いていて、大変な勉強家だったことがうかがえます。杉田玄白も『蘭学事始』で玄随のことを「漢学に詳しく、非常に物知りな人である」とか、「もともと秀才で、その上根気強い人なので、彼の研究は大変進んだ」と高く評価しています。

『西説内科撰要』は18年をかけ、3巻ずつ6回に分けて刊行されました。しかし、惜しくも玄随は、最初の出版から4年後、刊行半ばに42歳で世を去ります。そのため、その後の刊行は養子の玄真によって引き継がれたのです。



▲『西説内科撰要』

※透かしの家紋は右が眞作家、左が宇田川家のもの

### 4月中のひとの動き

人口	109,858人(前月比+140)
男	52,371人(同+57)
女	57,487人(同+83)
世帯	43,709世帯(同+181)
転入	653人
転出	469人
出生	75人
死亡	119人

(5月1日現在)

広報つやまは、環境保護のため再生紙と大豆インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください



### つぶ・や・き

#### 編集室

川は子どもにとって、魚を捕ったり、所によっては泳いだりと格好の遊び場です。大人にとっても、川面を渡る風の涼しさやせせらぎの心地良さなどを感じられる癒しの場。でも、雨で牙をむく大蛇に変身することもあるので、注意が必要！(和)



取材で訪れた清眼寺のぼたん祭。境内に響くベトナム琴の異国情緒豊かな調べが、色とりどりのボタンと相まって、幻想的な雰囲気を感じ出していました。美しいものを見たり、聞いたりできる取材は楽しいですね。(R)

子どものころ、梅雨の長雨にすっかり退屈すると、軒下から雨にぬれる庭のアジサイをよく眺めていました。アジサイの花の不思議な色、カタツムリの通った跡、カエルの鳴き声、雨のにおい…。この時期も嫌いじゃないです。(和)



つやま 広報

6月号  
平成20年  
2008  
644号

編集・発行(毎月10日発行)  
津山市総合企画部市長公室(市役所3階)  
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地  
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152  
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。  
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>

